



# 野生動物対策の状況

農林課林業振興室  
野生鳥獣専門員  
56-2174

## エゾシカ

村では、5月に57頭、6月は19日までに39頭のシカを捕獲し、4月からの累積が139頭となりました。昨年の同時期と比べて2割ほど少ない頭数です。

初夏は、シカの姿や生活が大きく変わる時期です。冬毛から夏毛への換毛は、6月中旬に首筋辺りから始まって7月までには全身が完了し、いまは橙色の背に白の斑点が並ぶ鮮やかな夏毛です。また例年5月下旬から6月中旬にかけて、多くの雌シカが出産しているようです。一方、雄シカの落角は、大人ほど早く4月上旬から始まり、2歳の若シカが最も遅く6月頃に始まります。早くに落角した大人の袋角は現在、秋に枝角として完成する長さの約半分くらいまで伸びています。

5月上旬から、上トマムの市街地で人に慣れた若い雄シカが目撃されています。人身事故はありませんが、花壇を荒らされるなどの被害が発生しています。追い払いたいと思っていますが、まだ成功していません。



## ヒグマ

6月19日現在までのところ、村内各地で散発的な活動情報があるものの、特に危険性や異常性があるような動きは見られません。昨年は6月の下旬から、上トマムの墓地や市街地周辺での滞在があったので、今年も特に警戒しています。新しい情報は広報折り込みや村ホームページをご参照ください。

夏はフキなどの草やアリをよく食べる時期で、森林内だけでなく河川の堤防や道路の法面なども餌場になっています。屋外でお過ごしの際は、家や道路の近くでも油断できません。ご自宅の周囲は雑草を刈ることで見通しよく、また、餌となる草を除去しておくことをお勧めします。

右図に、シカとヒグマのフキの食痕の判別点を示しました。痕跡は例外的な形もあり得るので、周辺を含めて全体的に観察して判別しましょう。



# ヒグマミーティングを開催しました



6月17日(金)に、「初夏のヒグマミーティング」が開催され、トマムコミュニティセンターに18人が集まりました。

村の野生鳥獣専門員から昨年のヒグマの動向や村の対応状況が報告され、今年の予測や取組についても意見が交わされました。また、酪農学園大学による電波追跡調査の中間報告では、予想を裏切るダイナミックな移動軌跡に、驚きの声が上がりました。

ヒグマ情報の共有や生態への理解は、興味深いだけでなく、私たちの安全に関わる事項であることから、村は開催方法を工夫しながら、今後も取組を重ねていく方針です。



農林課林業振興室野生鳥獣専門員  
56-2174



エゾシカの保護管理に学ぶ

ジビエ工房にて、エゾシカの食肉としての価値や可能性について説明を聞く生徒たち。地元猟師が皮を剥ぎ、丁寧に処理したエゾシカを前に、「生きること」そして、「命をいただくということ」について学びました。



アイヌの人たちが狩猟や採取などを行う際に作る仮小屋『クチャ』



森の民アイヌに 배우  
アイヌの方々から、自然界で生きるための術や知恵、狩りの手法のほか、回承文化であるウポポ(歌やリムセ(踊り))を学びました。



森の声を聞く

健康な森を守り育てることについて学ぶとともに、薪割りなどを体験しました。



ヒグマの森作り

森でヒグマの痕跡に触れ、その存在を実感。人と野生のあり方を真剣に考えました。

6月9日(木)、占冠村体験ツーリズム協議会(事務局細谷誠氏)により、占冠村の豊かな自然と人材を活かした環境教育事業『感響プログラム』が実施されました。今回は、奈良県西大和学園高等学校からの修学旅行生約130名を受け入れ、アイヌの歴史・文化のほか、エゾシカ、ヒグマ、森林分野の4つのプログラムが実施されました。生徒たちは、それぞれ興味のあるプログラムに参加し、自然豊かな北海道占冠村のリアルについて各分野の専門家から学びました。村民にとっては当たり前になっている風景や自然も都会で暮らす子どもたちにとっては新鮮な体験。見て、聞いて、味わって、体を動かして...。自然豊かな占冠だからこそできる『本物』の体験は、他では得ることのできない貴重な学びとなったはず。今後、同協議会の取組を通じて、よりリアルな体験の提供や占冠の素晴らしさを効果的に発信していきます。

感響プログラムで本物の学びを